

# 「伝承のない文芸」を伝承する ——『カプールの園』が越境する言語と世代

佃 陽 子

## はじめに

何かに突き動かされて、そうしたのかはわからなかった。ただ一ついえることは、それが抵抗ににているということだった。伝承できないものを伝承する。それはたぶんわたしの、いや、わたしたちの、ささやかな抵抗であるのだった<sup>1</sup>。

2016年に文芸誌『文藝界』に発表された宮内悠介の小説「カプールの園」の主人公レイは、日本語をしゃべることはおろか、読み書きもできない、英語モノリンガルの日系アメリカ人三世である<sup>2</sup>。それでも彼女は、自身が開発した全言語対応の光学文字認識（OCR）と自動翻訳を組み合わせたソフトウェアを使って、1974年にロサンゼルスで出版された日本語ガリ版刷りの文芸同人誌に掲載された評論「伝承のない文芸」を黙々と読み進めていく。彼女はその行為を、日系三世としての自身の、さらには日系人全体の集合的な「抵抗」とみなしている。それは何に対する抵抗なのだろうか。移民世代が日本語でつづった文芸は、英語モノリンガルの日系人にとって「伝承できないもの」だが、優秀なコンピュータープログラマーのレイはテクノロジーを駆使してその伝承を試みる。「伝承のない文芸」の伝承を可能にするのは、テクノロジーなのだろうか。

高度経済成長が終わりを迎えた後の1970年代後半から1980年代にかけての日本社会では、戦前に日本から海外に移住した日本人移民や外国生まれの日系人に注目が集まり、様々なメディアで日系人が次々と紹介される「日系人ブーム」とも呼ばれる現象が起きた。山崎豊子の小説『二つの祖国』（1981）およびそのドラマ『山河燃ゆ』（1984）をはじめ、それ以降も

日系人をとりあげた作品が日本人を主なオーディエンスとする大衆メディアで多数生み出された。そうした作品では、日系人はしばしば日本のナショナリズムとエスノセントリズムの視点からとらえられ、現代の日本人が失ってしまった日本の精神を持ち続けている人々としてノスタルジックに表象されてきた<sup>3</sup>。

「カブールの園」も、日系人をテーマにした日本の文学作品の一つにすぎないとみなすこともできるかもしれない<sup>4</sup>。2017年に本作を表題作とする著作『カブールの園』で三島由紀夫賞を受賞した際、著者の宮内は、自分は日系人を代表することはできないし、受賞の功績は自分ではなくむしろ日系人であると述べた。その一方で、1979年に東京で生まれ、4歳から約9年間ニューヨークで過ごした宮内は、自らについて「バイリンガルにはなり切れなかった」、「いわば一・五リンガルぐらいの人間で、英語は母語ではない」と語ったように、言語の問題において日本人移民一世に近い原体験を有している<sup>5</sup>。「カブールの園」には、主人公レイが翻訳を通して読んだ「伝承のない文芸」を含め、移民一世による日本語文芸が多く引用されている。こうした意味で、「カブールの園」は日系人の「伝承のない文芸」の伝承を可能にする日本文学であるともいえるのではないだろうか。

「カブールの園」は日本で多くの文学者らによる批評がなされている一方で、日系アメリカ文学研究者による批評はほぼない<sup>6</sup>。物語の主題が日系アメリカ人であっても、日本語で書かれ、日本で発表された、日本人作家による本作は、「日系アメリカ文学」とはみなされない<sup>7</sup>。日本における日系アメリカ文学やアジア系アメリカ文学に関する研究は1980年代からさかんになったが、そのほとんどは英語で執筆された日系ないしアジア系アメリカ人作家による文学作品を対象としており、戦前からの一世や帰米二世による日本語で書かれた作品についての研究はあまり多いとはいえない<sup>8</sup>。むしろ、アメリカにおける日系アメリカ文学研究では、そもそも日本語が読めるアメリカ人研究者が少ないことから、日本語による文学作品は数少ない英訳を通してのものでしかない。

フィクションである「カブールの園」では、『日系アメリカ文学雑誌集

成』に収録されている、日本語で書かれた、実在する二つの日系文学作品が引用されている<sup>9</sup>。本稿では、「伝承のない文芸」として取り残されようとしていた移民地の日本語文芸が、いかにして日本文学の中でよみがえり、それが現在の日系アメリカ人の世代と言語継承をめぐる現状にどのような影響を与えうるのかを考察する。

SF作家としてデビューした宮内の作品では、自身も語っているように「現実と虚構のせめぎ合い」が多く描かれているが、「カブールの園」においても、フィクション／虚構であるレイの物語に対する「“現実中の現実”」は日系人による日本語文学作品である<sup>10</sup>。日系文学作品を多く引用した本作の執筆にあたり、宮内は「素直に、奇をてらわず、外連見もなくしてシンプルに書くことが」日系人に対して最も誠実な態度であろうと考えたという<sup>11</sup>。たしかにその物語には、日系アメリカ人の史実と現在が、特に説明もなく登場する。本稿は、極力余分なものをそぎ落とした宮内の小説に、史実についての注釈を文学者でもない立場からつけるようなものかもしれない。しかし、日系文学の範疇に入らず、英訳もされていない、日本の純文学として発表された「カブールの園」がすくいあげた日本語日系文学に着目することで、本作が日本語と英語のはざまで生きた日本人移民の過去のことばをいかに現代のアメリカ社会につないでいるかを示したい。

## 1. 世代の物語としての「カブールの園」

まず「カブールの園」のあらすじを概観していこう。舞台は小説が発表された2016年とほぼ同じと思われる、現代のカリフォルニア州サンフランシスコ・ベイエリアである。主人公のレイは38歳の日系アメリカ人三世の女性で、ともにカリフォルニア大学バークレー校時代の友人であるライアンと黒人男性のダグとサンフランシスコでITベンチャー企業を立ち上げ、プログラミング部門のマネージャーをつとめている。レイは小学生時代に受けた、クラスメートからの人種差別的な虐待のトラウマに苦しみ、過干渉な母親との関係に悩んでいる。進学を機にロサンゼルスの実家を離れ、サンフランシスコへ逃れてきたものの、頻繁に電話をかけてくる母を放っておくことができない。タイトルにある「カブールの園」とは、レイ

が受けている「VR エレメンタリー」というヴァーチャル・リアリティを使ったトラウマ治療のことを指しており、レイの恋人ジョンがつけたニックネームである。白人ヒッピーのジョンは、60年代のビート・ジェネレーションを彷彿とさせる。

健康状態を心配した同僚のすすめに従い、一週間の休暇をとったレイはひとりヨセミテ国立公園に向かい、その途中で祖父母が第二次大戦中に収容されていたマンザナー強制収容所の跡地を訪れる。それをきっかけとして、レイは家族の歴史と記憶をたどりはじめる。マンザナーのビジターセンターの展示の中に、幼少時に世話になった日系一世のミヤケを思いがけず発見したレイは、ロサンゼルス日本人町リトルトーキョーに住むミヤケの息子を訪ねる。ミヤケから母と祖母の過去を聞く中で、レイの大学の学費のために、母が確執のあった祖母に頭を下げて、強制収容に対する個人補償で得た2万ドルを譲ってくれるよう頼みこんだ事実を知る。ミヤケは自身の父親も寄稿していた、ガリ版刷りの古い日本語の同人誌『南加文芸』をレイに無理やり押し付けた。

覚悟を決めたレイはリトルトーキョーで孤独に暮らす母親を訪ね、家の冷蔵庫に貼られた日本語の詩「鉄柵」とその英訳に気づく。一世のミヤケが訳してくれた収容所の詩を通して、母は折り合いのつかなかったレイの祖母の心情を理解し、自身の過去と向き合えたと打ち明ける。母の前では優秀な娘を演じてきたレイにも、イジメについてすべて知っていたと告げ、母と娘はぎこちないながらも和解する。その後レイは、自身が開発したスマートフォンのOCR自動翻訳ソフトウェアを使って、ミヤケの息子に渡された『南加文芸』に収録された「伝承のない文芸」をひとり読む。

祖母から母、自身へと三世代に渡る日系アメリカ女性の歴史のトラウマに向き合ったレイは、サンフランシスコに戻ってVR治療をやめることを決意する。物語の結末で、レイはプロモーションのためのイベントで自社が開発した音楽ソフトウェアのプレゼンテーションを生き活きと行う。マイノリティがどう生きるかはマイノリティ自身が決めてよいと気づいたレイは、自分なりの「カプールの園」を見つけたのだ。

「カブールの園」の主題の一つは三代に渡る日系母子の確執である。ここでは、レイの家族の物語を日系アメリカ人の世代と歴史にどう位置づけることができるのかを見ていこう。2010年代半ばで38歳の日系アメリカ人三世というレイの設定は、典型的な日系アメリカ人の世代とは一世代ほどのずれがある<sup>12</sup>。たいていの日系アメリカ人では、19世紀末から20世紀初頭にアメリカに移住した日本人が「一世」となり、「二世」となるその子どもたちの多くは1910年代から1920年代の戦前期に生まれた。移民の断続的なアメリカへの流入にもかかわらず、日系人に比較的是っきりとした世代が形成されたのは、1924年の移民法により、「白人」ではない日本人を含むアジア諸国からの新規移民の入国が事実上禁止されたためである。戦中の強制退去・強制収容を体験したのは、アメリカ人になれない「帰化不能外国人」の一世と、アメリカで生まれた米国市民の二世である。三世の多くは戦後生まれで強制収容を直接体験していないが、公民権運動を背景に育ったこの世代が1970年代に始まった強制収容に対する補償運動を主導した。1953年生まれのレイの母は二世とはいえ世代的には三世に近いが、補償運動のアクティビズムとは無縁で生きてきた。

一世にあたるレイの祖母は17歳の時に3歳年上の夫とともに義父に連れられて渡米した。義父は北カリフォルニアで農場経営をするつもりだったが、すぐに日米開戦となり強制収容されてしまった<sup>13</sup>。祖父母夫婦は戦中の混乱期には家族を形成するどころではなく、レイの母は戦後に生まれた<sup>14</sup>。レイの祖父母が正確にいつアメリカに入国したのかは述べられていないが、日系移民史からすれば、日米開戦がせまる1930年代末から1940年代初頭に夫婦で入国したというケースは珍しい。1924年の移民法が施行されて以降、日本人の新規でのアメリカ入国は極めて困難となり、かつて移民としてアメリカに居住していたか、留学生または日本企業や政府関係者でもない限り入国することは不可能であった。祖母の義父がかつてアメリカに居住しており、農場経営のためにアメリカに戻ってきたということはあるだろうが、祖父母の入国資格は不明である。留学生という名目で、実質的には父親の農場経営を手伝わせるための労働力として、若い息子夫婦を日本から連れてきたということなのかもしれない。

日米開戦後、祖父母一家は、ロサンゼルスから北へ約 360 キロ離れたデスバレーにあるマンザナー収容所に送られた。住居として与えられた急ごしらえの粗末なバラックは、他の夫婦と相部屋でプライバシーのかけらもない。相部屋にいたのが同じ一世のミヤケで、この時からミヤケはレイの一家を三世代に渡って見守り続けることになる。1943 年に日系人を収容所から出所させる過程で行われたアンケートは、反米的な不忠誠分子をあぶりだすための「忠誠登録」だったが、祖父母一家は話し合った上でアメリカへの忠誠を示すことにした。その一方、ミヤケ一家はそれを拒み、「不忠誠」の烙印を押されて北カリフォルニアにあるもう一つのトゥーリーレイク収容所に再隔離された。収容所に送られたばかりの頃と比べて、マンザナーでの暮らしは多少の不便はあれども豊かになりつつあり、祖父母一家はむしろ収容所から無一文で放り出されることを恐れていた。終戦を経て、一家はロサンゼルスに再定住することを選ぶ。収容所で離ればなれになったミヤケ一家とはリトルトーキョーで再会を果たした。トゥーリーレイクに再隔離された日本人・日系人のなかには、日本への送還やアメリカ市民権の放棄を選んだ者もいたが、最終的に大半の者がそうしたように、ミヤケ一家もアメリカにとどまることを選んだのである<sup>15</sup>。強制収容の衝撃から忠誠登録をめぐる世代間やコミュニティ内での分裂、退所に対する不安や再定住までのプロセスは、多くの日系アメリカ人の経験と共通するものである。

レイの回想において、母が生まれたのは 1952 年のマッカラン＝ウォルター法施行の翌年であったことが言及される。この法律によって、これまでアメリカへの帰化が許されなかった日本人一世によりやくアメリカ市民への道が開かれた。アメリカ生まれの母は生得的にアメリカ市民権を持っているものの、1953 年に母が誕生したことは、日本人という人種に対する差別的な法律が一つ取り除かれ、日系人がアメリカ社会の一部として受け入れられはじめたことを象徴している。

収容所内で目の当たりにした世代間の対立を他人事のように感じていた祖母は、戦後生まれの娘との関係においてそれを思い知ることになる。夫婦は娘に日本語を教えようとしたが、アメリカの理想を信じる娘は親を拒

絶し、英語モノリンガルのアメリカ人として成長した。実際には、強制収容を体験した日系人の多くは、レイの祖父母とは逆に、戦後に生まれた子どもたちに日本語や日本文化を教えることを避け、アメリカの社会や文化にすすんで同化しようと努めた。こうした状況の中、レイの母が日本語をはじめ日本に関する一切を拒絶したのも無理はないと思われる。戦後、日系人は中国系とともに社会的・経済的上昇を遂げ、「モデル・マイノリティ」としてもてはやされた。しかし一方で、米政府が収容所を出た日系人にアメリカ社会への同化や、中西部や東部への分散居住を推奨したにもかかわらず、その多くが最終的に西海岸へ帰還したことも事実である。レイの祖父母一家もシカゴへの再定住を検討したが、結局ロサンゼルスに移り住んだ。祖父母とミヤケ一家が戦後交流を続けたように、戦後の日系コミュニティは縮小したものの、形を変えて継続してきた。

日本語を拒絶し、アメリカの理想を信じて成長した母は、成人して日系女性としての現実を思い知らされる。19世紀にサンフランシスコでアメリカ初の女性消防士になったという白人女性のリリー・ヒッチコックにあらがれた母は、試験に合格して念願の消防士になったものの事務仕事ばかりだったためにやめてしまう。公民権運動と第二次フェミニズム運動を経て、女性消防士はたしかに増えつつあったが人種的マイノリティの母にはかなわぬ夢だったということであろう。そもそもヒッチコックはアメリカ初の女性消防士ですらなかった。上流階級出身でニューヨークからサンフランシスコにやってきたヒッチコックは幼いころから消防隊に強い興味を持ち、15歳の頃に消火活動に参加したそうだが、それをきっかけに名誉隊員という消防隊のマスコットの存在になったにすぎず、実際の消防士ではなかった<sup>16</sup>。非白人や女性が自由と権利を得た60年代に成長し、誰でも何にでもなれると信じていた母は、非白人で女性であるというインターセクショナルな問題に直面する。

母が現実には打ちのめされていた頃に祖父は他界するが、それは母にとって解放を意味した。レイが生まれたのはちょうどこの頃であろうと思われる。レイの父は日本から来た画家志望で、母の妊娠を知って姿を消したため、レイは父親の顔を知らない。レイが三世だというのはあくまで母方か



ら数えた場合であり、父方からみれば二世ということになるが、父の不在を考えればやはり三世ということになるだろう。日本語の話せない母がなぜ日本人男性と恋仲になり、その子供を身ごもることになったのかは語られないが、レイはことあるごとに母が父を罵るのを聞いて育つ。働きながらひとりでレイを育てた母は娘を溺愛し、高カロリーのアイスクリームを毎日与え続けた。肥満児となった幼いレイは、クラスメートから「仔猪ちゃん（ピギー）」と呼ばれて侮辱的な虐待をうけるが、母の前では優等生を演じ続ける。こうしたレイと母の関係は、多くの評者が述べているように現代でいう「毒親」を想起させる<sup>17</sup>。

三世代に渡る母と娘の確執は、父親や夫といった男性家族の不在が前提となっている。そのかわりに彼女らを支えた男性として登場するのはミヤケ父子である。レイや母とは異なり、二世のミヤケは父の生まれた国の言語である日本語を継承している。そして、レイと母が「失った」日本語こそが、母子が確執を乗り越える鍵となっていくのである。

## 2. 日本語がつなぐ「リメンブランス・アンド・アクセプタンス」

レイがヴァーチャル・リアリティを利用した実験的なトラウマ治療のために通院するのは、「リメンブランス・アンド・アクセプタンス・セラピー」というクリニックである。その名の通り、過去のつらい記憶を受け入れることによって心の治療を行うものであり、38歳のレイは仮想現実の中で8歳の小学生となり、当時受けた虐待や母との対話を疑似体験する。VR心理療法が思うような成果を上げられない中、レイが過去のトラウマを受け入れるきっかけとなるのが、祖父母が戦中に収容されていたマンザナー収容所跡地への訪問である。

「カブールの園」において、日系人強制収容は単なる過去の追憶ではなく、2001年9月11日の同時多発テロ以降のアメリカ、特にサンフランシスコの社会を反映している。9・11の直後から、70年前の真珠湾奇襲は露骨な比較対象としてそのイメージがメディアにあふれた。レイがマンザナーの展示で目にした訪問者のメッセージに「次はムスリムか？それともわたしか？」と残されていたように<sup>18</sup>、アラブ系やイスラム教徒への憎悪



犯罪も頻発し、第二次大戦時の日系人のようにアラブ系の人々を強制収容するべきではないかという議論すら実際に起こった。こうした社会風潮において、サンフランシスコをはじめとする当時の日系アメリカ人コミュニティは積極的にアラブ系との連帯を表明し、強制収容の過ちを繰り返してはならないと訴えてきた。

レイの心理療法に利用されている VR 技術は、9・11 によって起こったアフガニスタン戦争やその後のイラク戦争に従軍した米軍兵士の PTSD 治療を目的に開発されたものである。レイの VR 治療を意味する「カブールの園」は、恋人のジョンによるニックネームだが、カブールはむしろアフガニスタンの首都である。イスラム教徒が占めるアフガニスタンでは豚を食べないため、カブールの動物園には豚がいるという。VR 治療「カブールの園」はかつて仔豚とからかわれたレイの精神に安らぎをもたらす樂園というわけだ。その一方で、「園」ということは、日系人による自治が行われていた強制収容所のある種矛盾したユートピア的側面を想起させる。

レイの個人的な幼少期のトラウマに対する否認は、母と祖母を含む日本人・日系人の集合的なトラウマ、時を越えたレイシズムの被差別体験に連環している。ミヤケ二世がレイに言ったように、日本人・日系人の多くが被収容体験を恥とみなし、補償運動が活発になる 1980 年代まで沈黙を続けてきた。レイの抱える否認もまた、口に出すことができないレイシズムの被差別体験である。VR 治療で生成された仮想現実の中で、小学生時代のいじめっ子は、1984 年に公開されたハリウッド映画『ベスト・キッド』に登場する日系人空手家ミヤギのセリフをまねて「ワックスかける!」「ワックスとる!」とからかいながら、レイの尻を乗馬鞭でたたく<sup>19</sup>。辱めを受けるレイの脳裏には、ミヤギが強制収容所で妻子を失い、米軍日系人部隊の兵士としてヨーロッパ戦線で戦ったというエピソードが去来する<sup>20</sup>。『ベスト・キッド』が公開された 1984 年は強制収容に対する個人賠償金をめぐる連邦議会での議論が重要な局面を迎えていたが、祖母と没交渉で当時幼かったレイに、そうした政治的な動きは理解できていなかったであろう。だが、レイが母から逃れて自分らしくなれた UC バークレー進学のための学費は、強制収容の被害者である祖母が 1988 年の市民自由法

によって米政府から受け取った賠償金2万ドルが原資となっていたのである。

レイと母の「アクセプタンス」を促すのは、二人が知らない祖母の国の言語、日本語で書かれた日本人移民一世の文芸である。

柵を出づる日は  
たじろかざる汝のうちにあり  
その日きたるまで  
空虚なることばを吐きて  
また己れを吐きすつることなかれ  
戦ひは大いにしてかぎりなければ  
かぎりなきたたかひのうちに  
汝の敵を見失ふことなかれ  
汝をも失ふことなかれ<sup>21</sup>

一世のミヤケに英訳してもらったこの日本語の詩を冷蔵庫に貼り、母は繰り返し読んだのであろう。そして母は、長い間祖母を否定していたことへの後悔をレイに告白する。

この詩は一世詩人加川文一による詩「鉄柵」の一部で、1944年3月にトゥーリーレイク収容所で収容者によって発行された日本語文芸誌『鉄柵』の創刊号に掲載された<sup>22</sup>。日系人による日本語文芸誌は戦前に発行された『収穫』（1936-39）や、他の収容所で刊行されたものもあるが、トゥーリーレイクが「不忠誠者」の再隔離収容所となった後に創刊された『鉄柵』は帰米二世文学の原点であり、文学的水準の高いものとして評価されている<sup>23</sup>。加川は1924年の移民法が施行される直前に父親に呼び寄せられて14歳で渡米した一世で、トゥーリーレイクでは二世文学者の指導者として『鉄柵』の創刊に中心的役割を担った<sup>24</sup>。トゥーリーレイクでは強制収容に憤る二世の一部が米国市民権を放棄し、日本への送還を待つ中で、親日的な集団が結成されて過激化するなど緊迫した雰囲気にあった。『鉄柵』に関わった文芸人はそのような過激派と距離を置いていたが、「柵を出づ

る日」, つまり収容所を出るのは日本へ帰国する時だと覚悟していた。しかし、加川をはじめとする文芸人も最終的にはアメリカに残ることになった<sup>25</sup>。

加川の詩の「汝の敵を見失ふことなかれ 汝をも失ふことなかれ」という最後の二文にレイは胸を突かれる。母親から幼少期の虐待を知っていたことを告げられ、そのレイシズムを示唆されたレイは、「わたしは辱められていただけ。人種差別なんか受けていない！断じて！」と憑かれたように叫ぶ<sup>26</sup>。否認しながらも、それを口にしたことによってレイはその事実を受け入れていくようになる。

加川の詩に触れたレイはその後、同僚のダグやライアンと大学時代に開発した、全言語対応のOCRと自動翻訳のソフトウェア「ディープ・リーディング」を使って、ミヤケ二世から受け取ったガリ版刷りの日本語文芸誌『南加文芸』に収録された評論、「伝承のない文芸」を黙々と読み進める。『南加文芸』は戦後の1965年から20年間に渡ってロサンゼルスで刊行された日本語の文芸同人誌で、加川を筆頭に、『鉄柵』に携わった一世や帰米二世が多く関わった<sup>27</sup>。その刊行には戦後に渡米したいいわゆる「新一世」も多く加わり、「伝承のない文芸」を執筆した野本一平もその一人である。1932年に岩手県で生まれた野本は、1962年にロサンゼルスのリトルトーキョーにある西本願寺別院の開教師として渡米して以降、アメリカの日系新聞や雑誌などで日本語による文芸活動を行い、サンフランシスコにあった日系紙の一つ北米毎日新聞の社長も務めた<sup>28</sup>。『南加文芸』18号（1974年3月）に収められた「伝承のない文芸」は野本の著作の中でもっともよく知られており、後の日系文学研究においても重要な概念となったが、これを機に野本は『南加文芸』から距離を置くようになった<sup>29</sup>。「カブールの園」では野本の「伝承のない文芸」の中からかなりの部分が引用されており、英語モノリンガルのレイが、手書きの日本語二段組7頁に渡るこの評論を最初から最後まで読んだことが示唆される。野本の文章は「フィクションではかなわないようなリアルティ」であったため、宮内はあえてそのまま引用したのだという<sup>30</sup>。

日系移民一世が母語である日本語でつづった文学は、アメリカで生まれ

育った英語モノリンガルの二世以降への継承が期待できない、一代限りの「伝承のない文芸」であると野本は断じる。野本と同じ『南加文芸』の寄稿者で、戦前の呼び寄せ一世の詩人、外川明は、日本語で出版した自著を娘に読んでもらえない寂しさを吐露するが、それは移民地で生きる「日系文芸人が当然受けねばならぬ桎梏」である<sup>31</sup>。野本は日本語日系文学の将来に悲観的であり、その姿勢は卑屈さすら感じさせる。

だからこそ、英語モノリンガルの日系三世が日本語で書かれた野本の文章を読むという行為そのものが、レイにとっての「ささやかな抵抗」であり、さらにはレイ個人を超えた、日本語を知らない日系人世代を代表する抵抗でもある。それは、アメリカに生きる人種的マイノリティの、アメリカ社会に対する抵抗である。祖母たち一世の日本／日本語に背を向け、アメリカ社会／英語世界への完全な同化こそ正しい道だと母に吹き込んで、誘導した「より大きな何か」に対する抵抗<sup>32</sup>。誰でも何にでもなれるというアメリカン・ドリームを信じるよう人種的マイノリティを誘導する一方で、その希望が決して実現しないようにマイノリティの生き方を操作する、巧みに構造化されたアメリカ社会とその人種主義に対する抵抗。レイがそれに抵抗するということは人種主義を否定することではなく、ましてや容認することでもない。抵抗を通じてマイノリティは過去と現在の人種主義と向き合い、誰にも指図されず自分の生き方をマイノリティ自身が決める権利、つまり自己決定権を手に入れる。トゥーリーレイクで書かれた加川の日本語の詩を読むという行為を通じて、母が祖母を受け入れたように、レイもまた、野本の文章から「親の文字が、そのまま子の文字にならないという寂寥感」をすくい取ることによって自分自身と向き合う、「リメンブランス・アンド・アクセプタンス」にたどりつくのである<sup>33</sup>。

レイは野本の「伝承のない文芸」を英語でどのように読んだのであろうか。母の家にあった加川の詩は英訳も含まれているが、野本の文章は冒頭の一文が英語で訳出されているのみで、あとはすべて日本語原文であるため、レイが読んだ英訳を読者は想像することしかできない<sup>34</sup>。レイが開発した全言語対応 OCR と自動翻訳のソフトウェアは、AI 技術が急速に発展している昨今の状況からすれば、すでに実現されていても不思議はない

のかもしれない。それでも、移民世代が日本語で残したことを、日本語を「失った」日系人子孫が人の手を一切介さずにテクノロジーのみを駆使して英語で「取り戻す」ことは、実際には非常に困難である<sup>35</sup>。そこにはやはりレイ一家の母子三代の仲介役となったミヤケのような、日本語話者の介在が必要なのではないだろうか。「日系人というより日本人の目をしている」ミヤケ二世、そして『南加文芸』にも寄稿していたミヤケー一世は、子供時代の9年間をアメリカの英語環境で過ごしながらも「バイリンガルになり切れなかった」という著者の宮内そのものと重なる。「カプールの園」という日本文学を通じて、宮内は言語で分断された日系アメリカ人の世代の記憶をつなぐ仲介者となっている。

野本が「伝承のない文芸」とよんだ日本語日系文学の伝承は決して不可能ではない。野本は一世の日本語文学に悲観的な一方、「そこに存在するということが一つの大きな意味を持つ時がある」と評論を結んでおり、異国の言語でつむがれるアメリカ移民文学もまたアメリカの文化・社会の一部としてその内側から変化をもたらす可能性を持つことを否定していない<sup>36</sup>。それが予言であるかのように、一世による「伝承のない文芸」は日本文学として評価された「カプールの園」の中でよみがえっている。日本において日系移民がにわかに脚光を浴びた1980年代の日系人ブーム以降、日本で『南加文芸選集』が出版され、加川や野本のほか、藤田晃や山城正雄など『鉄柵』以来の寄稿者である呼び寄せ一世や帰米二世による日本語文芸の出版も相次いだ<sup>37</sup>。2006年にはリトルトーキョーで加川の詩碑が建立され、その記念として詩集も活字版で再出版された<sup>38</sup>。2021年に野本が他界した後も、彼が日系紙に書き残したエッセイは友人らボランティアによってインターネット上のブログで活字化され、更新され続けている<sup>39</sup>。「伝承のない文芸」は世代を越えて、移民地アメリカや母国日本を越えて、たしかに伝承されているのである。

## おわりに

本稿では小説「カプールの園」を日系アメリカ人史の視点から読み解き、日本文学が日本語日系文学の伝承に果たしうる役割について論じた。本稿

を結ぶにあたり、「カプールの園」と対になる作品である、デビュー前の宮内が22歳の頃に執筆した処女小説「半地下」を紹介したい。1980年代のニューヨークを舞台とする「半地下」では、プロレス興行のフィクションに取り込まれる、日本人姉弟のドラッグや暴力と隣り合わせの現実が、弟祐也の視点から生々しく描かれている。少年時代をニューヨークで過ごした宮内自身の実体験を織り交ぜた「半地下」の文学誌掲載が、「カプールの園」執筆のきっかけとなった<sup>40</sup>。「半地下」の祐也が宮内の少年時代であるならば、「カプールの園」のレイは性別こそ違うが、成人した宮内と同年代になる。学校での英語環境に完全に慣れ親しむことができず、自らのうちに「英語と日本語の戦う戦場」を抱える祐也の苦悩は、「自分の中で英語と日本語の折り合いがつかなくなってきて」日本に帰国した宮内自身とシンクロしている<sup>41</sup>。それはまた、「カプールの園」でレイが触れる、移民地アメリカにおいて日本語を捨てきれなかった加川や野本ら日系文芸人の悲哀と響き合う。

宮内が三島賞受賞記念インタビューで「彼らの言葉に恥じないものを」と日系文学者に対する敬意をこめて語ったように、日本人は日系人を代表することができない。しかし、日本語を母語とする日本人が、日本語でつむがれた一世や帰米二世のことは、英語モノリンガルの日系人世代に伝承する仲介はできるだろう。レイの開発した「ディープ・リーディング」の実現は待ち遠しいかもしれないが、日系人の世代と言語をつなぐミヤケのような仲介者はやはり必要なのだ。

本稿は、JSPS 科研費 24K15493「日系人のメディア表象にみる越境性とナショナル・アイデンティティについて」の助成による研究成果の一部である。

## 注

- 1 宮内悠介『カプールの園』文藝春秋、2017年、72。
- 2 「カプールの園」の初出は『文學界』70巻10号（2016年10月）、9-44。
- 3 日本における日系人の表象については、拙稿「日本の大衆メディアにおける日系人の表象」『教養論集』（成城大学法学会）27号（2017年）、69-85を参照。1984年にドラマ『山河燃ゆ』が日系コミュニティで論争となり、アメリカでの放映が中止になった

- ことについては、拙稿「越境する日系人の表象—『二つの祖国』と『山河燃ゆ』をめぐる日米での論争から—『変動する社会と法・政治・文化—成城学園創立 100 周年記念・成城大学法学部創設 40 周年記念』（信山社，2019 年），321-52 を参照。
- 4 「第三十回三島由紀夫賞発表」『新潮』114（2017 年 7 月号），134-35。
  - 5 宮内悠介「第 30 回三島由紀夫賞受賞記念インタビュー 彼らのことばに恥じないものを」『新潮』114（2017 年 7 月号），158-163。授賞式での宮内のスピーチは YouTube で視聴することができる。新潮社「第 30 回三島由紀夫賞受賞『カプールの園』宮内悠介さん」2017 年 8 月 10 日 <https://www.youtube.com/watch?v=GAOTLCk8ibE>，（2024 年 11 月 1 日閲覧）。
  - 6 小説「カプールの園」は第 156 回（2016 年下半年期）芥川賞候補作に選出され，受賞は逃したものの高い評価を受けた。『朝日新聞』2017 年 1 月 25 日夕刊。ジャーナリストで，ジョン・オカダ『ノーノー・ボーイ』の翻訳者でもある川井龍介は，全米日系人博物館のオンライン・ポータル，ディスカバーニッケイでの連載記事「日系アメリカ文学を読む」において，日系アメリカ人作家による作品だけでなく，日本人による作品も含めており，その中で『カプールの園』を取り上げている。川井龍介「日系アメリカ文学を読む 第 9 回カプールの園」ディスカバーニッケイ，2017 年 6 月 23 日 <https://discovernikkei.org/ja/journal/2017/6/23/kabul-no-sono/>（2024 年 11 月 21 日閲覧）。また，アジア系アメリカ文学研究者の牧野理英は，日系アメリカ人の収容所文学に関する研究書において，「日系作家以外」による文学として『カプールの園』を挙げている。牧野理英『抵抗と日系文学 日系収容と日本の敗北をめぐる』三修社，2022 年，30。
  - 7 文学研究者の藤沢全は，執筆した言語や，作者がアメリカに滞在した期間や滞在資格にかかわらず，日本で出版されたものは日本文学であり，日系アメリカ文学ではないと述べる。藤沢全『日系文学研究』大阪教育社，1985 年，45-46。もっとも，本稿において「カプールの園」が日系文学か否かという議論はさほど重要ではない。この問題に関する筆者の姿勢については，拙稿「日本の大衆メディアにおける日系人の表象」特に 72-73 を参照。
  - 8 日本における日系／アジア系アメリカ文学研究の代表的な研究として，植木照代，ゲイル・K・佐藤編『日系アメリカ文学—三世代の軌跡を読む—』（創元社，1997 年）やアジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学—記憶と創造—』（大阪教育図書，2001 年）などがある。その中で対象とされる文学作品の大半は英語によるものだが，水野真理子は戦前の一世代から戦後 1980 年代までの約一世紀に渡って，日本語作品も含めた日系文学作品の歴史を総括している。水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷—1880 年代から 1980 年代にかけて』風間書房，2013 年。
  - 9 篠田佐多江・山本岩夫編『日系アメリカ文学雑誌集成』全 22 巻，不二出版，1997-98 年。
  - 10 宮内はデビュー作『盤上の夜』（東京創元社，2012 年），続いて発表した『ヨハネスブルグの天使たち』（早川書房，2013 年）でも SF 大賞を受賞している。
  - 11 宮内「受賞記念インタビュー」，162。



- 12 レイは本作発表時の宮内とはほぼ同じ年齢であり、後述するように、それは「カプールの園」と対になる作品「半地下」と関係している。
- 13 『カプールの園』、35。
- 14 前掲書、53。
- 15 日系二世の日本への送還や市民権放棄についての研究は、村川庸子『境界線上の市民権』（御茶の水書房、2007年）を参照。
- 16 資産家ハワード・コイトと結婚したヒッチコックは、その莫大な遺産をサンフランシスコ市に寄付し、彼女を記念して建設されたのが現存するランドマークの一つ、コイトタワーである。Frederick J. Bowlen, “Notable People – Lillie Hitchcock Coit,” originally published in 1939, San Francisco Fire Department Museum, <https://guardiansofthecity.org/sffd/people/coit.html> 一方、アメリカ初の女性消防士は1818年にニューヨークで消火活動に参加した黒人女性モリー・ウィリアムスで、しかも彼女は奴隷であったのは皮肉である。U.S. Fire Administration, “The U.S. Fire Administration Celebrates Black History Month”, Feb. 1, 2024, <https://www.usfa.fema.gov/blog/usfa-celebrates-black-history-month/> (2024年11月25日閲覧)。
- 17 片岡義男、野崎敏、石田千「創作合評（第488回）「カプールの園」宮内悠介『オンライン飛行』高樹のぶ子」『群像』71巻11号（2016年11月）、340-52。
- 18 『カプールの園』、46。
- 19 原題は *The Karate Kid* だが、日本では『ベスト・キッド』として公開された。東海岸からロサンゼルスへ引っ越してきたイタリア系アメリカ人の少年ダニエルはクラスメートからイジメの標的にされていたが、清掃員の日系人で実は空手の達人ミヤギから指導を受け、空手チャンピオンとして成長する物語である。「ワックスかける／とる」のセリフは、清掃の手伝いばかりやらされてダニエルが辟易していたところ、実は清掃の動作が空手につながっていたというくだりを指す。アメリカで好評を博した *The Karate Kid* は1986年、1989年、1994年に続編映画が公開され、2010年の映画では舞台をアメリカから中国に移し、ジャッキー・チェンを師匠役に配した。そのほかにも1989年のテレビアニメシリーズ、2018年のテレビドラマシリーズなど、アメリカのマーシャル・アーツメディアの代表的な作品となっている。
- 20 劇中では、妻とマンザナー強制収容所に入ったミヤギは志願して米軍に入隊し、果敢に戦って最高位の名誉勲章を受章したが、収容所に残された身重の妻が出産の際に子どもとともに亡くなったことを戦地で知らされたことが語られる。ミヤギ役を演じた日系二世のノリユキ・パット・モリタは、戦時は11歳で、実際にアリゾナ州のヒラ・リバー収容所とトゥーリーレイク隔離収容所に入っていた。Brian Niyya, “Pat Morita,” *Densho Encyclopedia*, [https://encyclopedia.densho.org/Pat\\_Morita/](https://encyclopedia.densho.org/Pat_Morita/) (2024年11月4日閲覧)。
- 21 『カプールの園』、64-65。
- 22 加川文一「鉄柵」『鉄柵』創刊号（1944年3月）、22-23、『日系アメリカ文学雑誌集成第5巻』（不二出版、1997年）収録。
- 23 篠田佐多江「日系アメリカ文学雑誌集成解題（4）『鉄柵』—発展途上の帰米二世文学」

- 篠田佐多江・山本岩夫共編著『日系アメリカ文学雑誌研究—日本語雑誌を中心に—』（不二出版、1998年）54-69。
- 24 加川はスタンフォード大学の宿舎などで働きながら独学で英語と英詩を学び、同大教授の文学者イヴォール・ウィンターズの師事を仰いで英詩集を出版するなどその才能が高く評価された。しかし、1930年以降はなぜか英語で詩を書くのをやめてしまい、日本語のみの創作活動を続けた。『加川文一詩集』加川文一詩碑運営委員会、2006年；桑井輝子「在米日本人「移民地文芸」覚書（5）「石は直角する」：加川文一の自由詩の探究」『言語・文学研究論集』9（2009年）、53-63。
- 25 篠田「(4)『鉄柵』」。
- 26 『カプールの園』、69。
- 27 篠田佐多江「日系アメリカ文学雑誌集成解題（8）『南加文藝』—ロサンゼルスに根付いた文芸誌」『日系アメリカ文学雑誌研究』127-43。
- 28 『羅府新報』2021年3月6日。野本の本名は乗元恵三。日本語で執筆したコラムを集めた『箸とフォークの間』（巴書房、1996年）や、『宮城与徳 移民青年画家の光と影』（沖縄タイムズ、1997年）などの日本人移民の伝記を含め、日本での著作が多数ある。
- 29 篠田「(8)『南加文藝』」、140；野本一平「伝承のない文芸」『南加文芸』18号（1974年3月）、49-55、『日系アメリカ文学雑誌集成 第19巻』（不二出版、1998年）収録。
- 30 宮内「受賞記念インタビュー」、162-63。
- 31 野本、51。
- 32 『カプールの園』、66。
- 33 前掲書、74；野本、51。
- 34 管見の限り野本の評論も「カプールの園」も英訳されていないため、「伝承のない文芸」を含むレイの物語は日本語を通じてでしか読むことができない。
- 35 筆者が関わっている、戦前の一世代が残した日本語資料のアーカイブ・プロジェクトでは英訳が非常に大きな課題である。レイの開発したソフトを使って膨大な日本語資料を短時間で解読・英訳できればどんなにいいだろうかと、正直思わざるを得ない。近年ではAIを搭載したOCRを使って、現代人が読むことのできない日本の古文書を解読・翻刻する技術が開発されているが、明治以降の近代文字はバリエーションが多岐に渡るため、その解読はさらに困難である。ましてや、移民世代の日本語は英語をカタカナにした独特の言い回しが多数あるので、日本語を母語とする者でも解読は容易でない。そのような現実からすれば、レイが野本の文章を読むことができたというのは、宮内ならではのSF的要素とも言える。筆者のプロジェクトについては、「戦前の在米日本人移民コミュニティにおける横浜正金銀行の役割とそのアーカイブ・プロジェクト」『教養論集』31号（2023年）、65-74；「1930年代の在米日本人による郷里送金：横浜正金銀行ロサンゼルス支店の送金票の分析から」『教養論集』32号（2024年）、75-89を参照。
- 36 『カプールの園』、77；野本、55。
- 37 1980年代以降に出版された、『南加文芸』寄稿者による著作については、篠田「(8)『南

加文芸』」143を参照。

38 『加川文一詩集』。

39 「フレスノ便り」<http://ippeinomoto.blog.fc2.com/>（2024年11月25日閲覧）。

40 宮内「受賞記念インタビュー」, 159。「半地下」の初出は『文學界』70巻2号（2016年2月）, 9-57。

41 宮内「受賞記念インタビュー」, 160；『カプールの園』, 192。